

ライフデザイン学研究

Journal of Human Life Design

第 5 号

東 洋 大 学

ライフデザイン学部

現代韓国における死者供養の変化についての 社会学的考察

—四十九斎・預修斎を中心に—

A Sociological Consideration of Contemporary Korean Memorial Rites
—49th Day Funeral Commemoration and Memorial Services Performed Before One's Death.

井上 治代*
INOUE Haruyo

要旨

本論文の目的は、高度経済成長によって社会変動が起きた社会で伝統的な死者儀礼がどのように変化したかを、現代韓国の「四十九斎」と「預修斎」に着目して社会学的に考察することである。日本の「四十九日」法要にあたる韓国の「四十九斎」について、まず高度経済成長期以降の変化を先行研究より把握し、つづいて近年に登場した「四十九斎保険」の聞き取り調査からその変化を考察する。さらに日本では儀礼という形では残っていないが、韓国で今でも受け継がれている「預修斎」について紹介する。

また、「四十九斎」と「預修斎」は、ともに中国の唐代後期に成った『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』にその源流を見ることができる。したがって本論文は、中国の「死者供養」を源流にもつ韓国と日本の個別的な変遷に着目し、檀家制度を運営基盤にしてきた日本仏教が、近年、その基盤衰退ゆえに今後の行方を模索する中で、檀家制度をもたない韓国仏教がどのように展開してきたのかを把握することも射程に入れている。

キーワード：韓国の死者儀礼の変化、四十九斎、預修斎、宗教的多元性 習合

1. 序論

1-1. 目的

筆者の研究課題は、高度経済成長を経験し社会変動が起きた社会で伝統的な死者儀礼がどのように変化したかを、東アジア地域の並行的な事例の比較分析を通じて考察することである。本論文では、現代韓国における死者儀礼の変化について「四十九斎」（七七斎）と「預修斎」（生七斎）に着目して社会学的に考察する。日本の「四十九日」法要にあたる韓国の「四十九斎」の変化について、まず高

* 東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

度経済成長期以降の変化を先行研究より把握し、つづいて近年に登場した「四十九斎保険」の聞き取り調査から考察する。さらに日本では儀礼という形では残っていないが、韓国で今でも受け継がれている「預修斎」について紹介する。韓国における預修斎の儀礼は日本の文献で紹介しているものがごく少なく¹⁾、あえて取り上げることに意義があると考ええる。

生前に自らの死後の冥福を祈って行う「(生前)預修斎」(生七斎)と、遺族が死者の冥福を祈って行う「四十九斎」(七七斎)は、中国の唐代後期に成った『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』にその源流を見ることができる。本論文は産業化を経た韓国の死者儀礼の変化を分析するものであるが、一方で巫俗や儒教・道教・仏教が習合した中国の「死者供養」を源流にもつ韓国と日本の、現代社会における死者供養のあり方から、両国の個別的な変遷に着目し、檀家制度を運営基盤にしてきた日本仏教が、近年、その基盤衰退ゆえに今後の行方を模索する中で、檀家制度をもたない韓国仏教がどのように展開してきたのかを把握することも射程に入れている。

なお本論文にあげる研究は、『『供養の文化』の比較研究をとおして見る『死』の表象の形成過程と現代の変容』(科学研究費補助金 基盤(B) 平成19年度～平成21年度、研究代表者・駒澤大学・池上良正)による研究の一環である。

1-2. 古代インド仏教儀礼の中国化―「生七斎」から「七七斎」へ

古代インドで形成された仏教は、人間の死後49日の間(中有)には輪廻の思想により地獄・餓鬼・修羅・畜生・人間・天上といった六道の世界に生まれ変わると考えられ、その個々人の苦しい輪廻の鎖を断ち切り、自ら悟りを開くことに意味があったが、中国では、自分に向かうだけでなく他者(衆生)も救済しようという救済仏教としての方向性を強めていく。そして本来、仏教では死後49日以降の死者供養など道理に合うはずがないが、中国で百日目、1年目、3年目の祭祀が加わり、七日ごと四十九日までの7回と、その後の3回を加えて死者祭祀が10回となり、そこに道教と習合した十王の審判があたりれた。このように人間の死後49日(中有)までを対象としてきた古代インド仏教が、1世紀に中国へ伝わり、巫俗や儒教の影響を受け、特に道教と習合して流布した冥界での十王の審判が加わることによって、祭祀期間が死後2年(3年目の忌日まで)に拡大されたのである。

この中国の巫俗や儒教の影響を受け、道教と習合して行く過程でつくられた、インドに原典を持たない中国撰述経典が『佛説閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』²⁾(以下『預修十王生七経』と略す)である。これは中国の唐代後半期(9世紀)、韓国では統一新羅、日本は平安朝前期にあたる時代につくられ、巫俗や儒教を土台に仏教の救済観と道教との習合、すなわち十王信仰による死者供養システムの展開過程が見てとれる興味深い経典である。

その前半には、生前に自らの死後の冥福を祈って行う①「生七斎」(「預修」または「逆修」ともいう)の儀礼と功德が³⁾、後半に生者が死者の冥福を祈って行う②「七七斎」(韓国の「四十九斎」)の儀礼と功德が説かれ⁴⁾、最後に③十王の名前が列挙され、各王ごとに「讃」⁵⁾が付けられて、冥界での死者の様子が描かれている。

本論文がとりあげる『預修十王生七経』は『大日本統蔵経』所収によるものであるが、その初めに挿入されている一文から、成都府の大聖慈寺の藏川がそれまでにあった「預修生七経」に「讃」を付したであろうことが判断できる。最初の讃によれば、この経文は仏陀が閻羅王に「授記」した形になっ

ている。すなわち仏陀によって閻羅王は冥界の王に位置づけられ、道教における寿命を裁定する冥界の長官である泰山府君とともに地獄の裁判官の一人に位置づけられた。また題名に「生七経」とあるように、この経は、もともとは生前に自己のために行う「預修」を勧めるものであった。しかし、これが唐代後半から、故人のための追善齋へと転じて、生七齋と七七齋とが結合された經典ができ、さらにそのあとに浄土教との関係で「讃」が付け加えられたものと考えるのが有力な解釈である〔塚本1975：315-399、小南2000：159-194〕。

この經典の内容を要約すると、次のようになる。人が死ぬと、冥土にある死者が、十王たちの役所を訪れ、生前の罪状の審判が行われ、そのさいに生前に本人が自分の死後の冥福のために「生七齋」を行っていれば極楽往生できる。そうでなくても遺族が死者のために7日毎に49日まで齋を営めば、その功德が死者にあてられ、死者は極楽に生まれかわることができる。生七齋は毎月二度、七七齋は、七日ごとに四十九日まで続けられ、それ以後は、百日、一年過、三年過に齋を設け、死者の追福を行わなければならない。

『預修十王生七経』は、中国では基本的には失われてしまっているが、唐代後半期から宋代にかけて盛んにこの経文が読まれたのみならず、この經典を拠り所として、死者の親族が施主となって追福儀礼が執り行われるなど、当時の社会の中で、実際に生きて機能していたのであった〔小南2000：161〕。

仏教は中国より4世紀後半に韓国へ伝わり、6世紀に韓国経由で日本に伝わった。その後も中国である程度熟成した「死者供養」システムは両国に伝播され、それぞれ独自の展開をみせている⁶⁾。

韓国では、現代でも仏教寺院で「預修齋」が執り行われおり、また四十九齋は仏教儀礼としてだけでなく、一般習俗化して定着している。したがってキリスト教信者が死後四十九日目に祭祀を行うことも珍しくはない。

日本では先にあげた『預修十王生七経』をもとにつくられたとされる『地藏菩薩発心因縁十王経』（略称として『地藏十王経』）が、平安末期に末法思想と冥界思想とともに広く浸透した。冥界のイメージの浸透については源信が記したとされる『往生要集』がその端緒であると考えられている。また四十九日法要は伝統儀礼として現代にも定着しているが、「預修、生七」は「逆修」の語が一般的に使われ、平安末期から鎌倉期の逆修塔・逆修碑（墓）などは残っているが、今日儀礼は存在していない。現代では、生前に墓を建立したり、位牌をつくることに「逆修」の語が当てられることが多いようだ。

1-3. 韓国の伝統的な死者儀礼

韓国では、三国時代に中国から仏教が伝来し、やがて新羅、後三国時代を経て、高麗時代で仏教は国家宗教として用いられた。したがって死者儀礼も仏教を中心に行われ、儒教や巫俗も混在していた。先祖の位牌は寺院に安置し、僧侶の手を借りて供養を行っていたという。このように位牌をはじめ先祖祭祀のすべてのことを寺院が担当していたので、祭祀を行う方式も仏教式祖先供養の形態を取っていた〔金美栄2008：55〕。

しかし続く朝鮮時代になると、高麗末に中国から伝わった『朱子家礼』の影響を受け、排仏崇儒政策がとられた。朝鮮の500年間、儀礼は儒教のもとで実践されたため、現代韓国人にとっての伝統的

な死者儀礼は、朝鮮王朝が国家形成理念とした儒教にもとづいた『四礼便覧』の喪礼が正統な儀礼として存在している。特に、太宗（1401～1419）以降は先祖の位牌を祀る家廟（祠堂）を建てず、さらには儒教式祖先祭祀を行わない場合は厳重な処罰を与えたりもした。祖先祭祀の継承方式も、仏教の影響の下ではすべての子女に均等な機会が与えられていたが、宗法に基づいた儒教の家族制度が適用されることによって、長男が独占的に継承するようになるのである〔金美栄2008：55〕。

死後の喪礼は3日葬、5日葬、7日葬、9日葬、11日葬、13日葬、15日葬、17日葬があり、親への孝の度合いは喪礼の期間で判断されたりもした。服喪期間に行われる凶祭については、儒教式の儀礼としては、告別式または火葬を終えたあと行う3回の「虞祭」⁷⁾、亡くなって1年後の命日に行く「小祥」、2年後の命日に行く「大祥」がある。また仏教儀礼にその始まりを持つ脱喪儀礼として「四十九斎」「百日斎」がある。

脱喪以後の「祭祀」には、祭主から数えて4代祖までの先祖に対して、故人の忌日（命日）に家内で行う「忌祭」と、名節（正月、秋夕）には「茶礼」という祭祀が行われる。五代祖からは次の段階に移り、年に一回、日を定めて墓前で祖先を供養する「時祭」が行われる。

ここで「斎（재）」と「祭（제）」の用語の違いについて述べておくことにしたい。来世や死後の霊的存在を認めない儒教に対して、輪廻思想をもって来世を提示している仏教の死者儀礼は「薦度斎」といって、先祖やその他の死者の靈魂を慰め、冥界で極楽往生させることに源を発する祭祀である点の特徴である。「薦度斎」には四十九斎、預修斎、水陸斎、盂蘭盆斎などがある。そして梵唄（声明）僧の参与する儀礼があり、その規模によって常住勤供斎・各拝斎・靈山斎に区分される。

このように仏教の祭祀には「斎」の語が当てられ、一般的な儒教式の祭祀には「祭」の語が使われている。ただし、仏教にはじまりをもつ儀礼でも仏教徒以外の人が行っていて、そういった場合には「祭」の語を使って一般祭祀化し、逆にもともと儒教や巫俗にその始まりを持つ儀礼を寺で行う場合には、その儀礼に「斎」を付け死者の極楽往生を願う儀礼として行われている。

現在、インターネットや一般的な案内書にある死者儀礼の解説には、仏教にその起源を持つ儀礼であっても、一般化しているものは「斎」ではなく「祭」を付けて「四十九祭」「百日祭」といったように表記されているものが見受けられる。

2. 脱喪儀礼としての「四十九斎」の変化

韓国では1960年からの急激な産業化によってソウル首都圏に5割近い人口が集住するという驚異的な人口移動と、家族形態や生活様式の変化が起こった。それによって住宅事情、墓地不足、葬儀の問題など、大きな変化を余儀なくされた。その結果、自宅死から病院死へ、そして病院斎場の増加をみたのである。集合住宅での葬儀問題解決、あるいは時間に制約されたサラリーマン生活スタイルに合った儀礼、または死者儀礼における女性の労働からの開放など、さまざまな観点から葬儀の簡素化がみられ（1969年、「家庭儀禮準則に関する法律」制定）、墓地不足問題の解決のための火葬化（面積縮小）、自然葬の導入（2001「葬事に関する法律」改正施行）がすすめられた。国家が主導して喪礼の簡素化を促し、現在では一番短い3日葬が定着した。このような死者儀礼の変化についての研究は、韓国の研究者もさることながら、竹田旦[2000]、高村竜平[2004]、朝倉敏夫[2007]、秀村研二[2007]、

川上新二〔2007〕といった日本人研究者にも優れた先行研究がある。紙面の制約上それらの検討は別稿で行うこととし、ここでは四十九齋に絞ってその変化を見ていくことにしたい。

2-1. 先行研究にみる「脱喪儀礼」の変化

1973年9月以来10ヶ月間、韓国の農村デソンディで先祖祭祀のフィールド・ワークを行ったR.ジャネリは、その調査から服喪期間について、最も長い場合は先祖の2回目の命日（いわゆる3年喪）までであるが、それを没後百日目で終わらせたり、第1回目の命日で終わる場合もあると説明しながら、さらに新しい傾向を報告している。期間が長くなればそれだけ儀礼も増え、出費もかさみ、遺族の不便も大きくなる。そこで仏教の服喪期間である四十九日に着眼して寺で祭祀を行い、村人に対するもてなしも同時に済ませ、儀礼期間の短縮、儀礼の回数の縮小、接待費用の節約をしているというのである。しかし、1973年の時点では、それはまだ新しい試みであつたらしく、周囲の村人のとまどいも同時に報告されている〔R.ジャネリ他、樋口他訳1993：115-117〕。

R.ジャネリの調査は1970年代前半で、しかも農村での事例であるが、2000年以降の韓国社会で調査をしている具未来は、「現代人の居喪期間を考察すると、百日脱喪は非常に稀で、三虞祭を過ぎして脱喪を兼ねるか、三日葬とともに脱喪する場合がほとんどである。よって、『死者の極楽薦度』という目的を担う四十九齋が、以前は仏教信者たちを中心にした宗教儀礼であつたのが、近頃になるにつけ次第に、脱宗教的性格を帯びた脱喪儀礼として受容される傾向が見られる。すなわち、仏教信者でなくとも、百日脱喪は負担が大きく三日・三虞祭の脱喪ではもの足りないという者たちに、四十九齋はうまく適合した脱喪儀礼となっている」と指摘する〔具未来2005：74-75〕。

筆者のソウルでの聞き取り調査でも、3日葬が終わればそのまま脱喪したり、四十九祭を行うぐらいが多いという話を聞いた。また、死者儀礼のやり方などが書かれた本にも、正統な儒教式脱喪期間や儀礼が紹介されてはいるものの、その多くは「最近では虞祭を行わないか、一度に済ませて脱喪とするケースも増え、その後の小祥や大祥は、行ったとしても2つ合わせて小・大祥として一周忌の祭祀を済ませる人々などが出てきている」などといった内容の解説をしている。

四十九齋に限ったことではないが、近年の韓国の死者祭祀について川上新二は次のように述べている。祭祀を行なう家の主婦は祭祀の供物に加えて、祭祀に参加するために家に来る人々の食事を用意しなければならず、それが大きな負担となる。主婦たちにとって自分の家で祭祀を行なうことには大きな負担が伴う。寺に位牌を預ければ各祖先の命日ごとに祭祀を行なう必要はなく、陰曆正月、百中（陰曆7月15日）、秋夕（陰曆8月15日）の年3回行なえばよいということである。そして、寺に経費を納めればすべて寺側で儀礼の準備をしてくれるということである〔川上2008：48〕。このように近年、自宅で儒教祭祀を行なう代りに、寺院に位牌を預けて供養儀礼を行なってもらふ事例も見られるようになってきているが、それは、祭祀が順調に受け継がれないという事情や、祭祀を準備するための苦勞からの解放という女性（主婦）側からの要求が、その理由となっているようである〔川上2008：49〕。

2-2. 「四十九」祭祀の一般化

筆者が韓国を訪れたとき、著名人が亡くなってキリスト教式の葬儀を行ったというテレビ・ニュースが放映されていた。そしてしばらくしてまた韓国を訪れると、同じ故人の四十九祭が報じられた。

このように韓国人は、仏教徒以外にも「四十九祭」を行い、それが仏教に起源をもつ行事と意識している人は少ない。この儀礼を仏教徒は寺で行うが、仏教徒でない者も一般的に墓前などで執り行っている。

筆者は、父親が牧師という40歳の男性から、1981年に行ったという祖母の四十九祭について、聞き取り調査を行った(2009年7月に調査)。四十九祭が行われた祖母の墓地は、京畿道化城市向南邑にある。

祖母の宗教はキリスト教ではないですが、父が牧師なので教会墓地に埋葬しました。火葬はしませんでした(1981年における韓国の火葬率は2割に満たない)。家では祭祀を執り行わず、四十九祭は祖母の墓前で実施しました。四十九祭の順序は、通常のキリスト教礼拝と一緒に祈祷と賛美歌を歌いました。食べ物是一般韓国の祭祀食べ物を準備して食べました。祭祀膳も墓前にこしらえました。朝早く出発して午前9時～10時までの1時間ぐらい祭祀をしました。それ以後は、甥たちと墓地近くで遊びました。お父さんは長男として役目を果たしましたが、牧師としての役目はしなかったです。大部分のキリスト信者たちも、このようにします。韓国の四十九祭は仏教で始まったが、今は普遍的なメモリアルデーとなっています。

大部分の韓国のキリスト教信者は、古くから毎年先祖の祭祀を実施したり、四十九祭を行っていたという。それは僧侶が主導する仏式の四十九祭ではなく、一般の追慕式形態で、特定の宗教色のないメモリアルデー(Memorial day)になっているとのことである。被調査者の父、つまり四十九祭を主催した長男がキリストの牧師であったので、キリスト教礼拝と一緒に祈祷と賛美歌を歌ったが、主催者は牧師としてではなく、あくまでも長男として儀礼を行っている。ここに宗教的寛容がみられ、宗教多元性をその特徴に持った韓国社会の一面を知ることができた。

仏教以外の宗教教団では人々が四十九祭を行うことに関して、宗教教義との整合性を考えねばならず、苦勞しているようである。仏教文化情報研究院理事のキム＝ユシンは『仏教新聞』(2008年7月5日)の中で次のように書いている。

「わが国では人が死ねば四十九祭をさしあげる。仏教徒でなくてもそれを行うことに違和感がない。隣の宗教⁸⁾では、この四十九祭が問題になるようだ。自分たちには全く関係ない風俗だからとこれを排撃しようと思っても、韓国人の日常生活の中でも深く入り市民権を得ていて、たやすく消すことができないからだ。信徒たちの要求があれば49日目の日を記念する追悼式や慰霊ミサなどを行っている。四十九祭は仏教を超えて韓国の社会全般で幅広く定着した」という[キム＝ユシン2008]。

四十九祭についての研究が多数ある具未来は、「来世はもちろんのこと、死後の霊的存在も認めない儒教と、輪廻思想を通して体系的な来世を提示している仏教の死に対する捉え方は、互いに根源的な差異を内包している」と言う。しかしながら「仏教が弾圧された朝鮮時代にも儒教の死生観と対峙する薦度齋は、儒教祭祀と並んで共存してきた。さらに、このときの共存は排他的共存ではなく、相互補完的側面をもったまま、存続してきたという点が何よりも重要である。これは新しい価値理念として導入された儒教の死生観が、民間の本源欲求である来世観を提示できなかったことにより、仏教の救済思想が儒教の埋めることのできなかった宗教的欲求を充足させるのに、依然として有効であったからである。同時に、死者を供養する薦度齋が儒教の祖先崇拜、および孝の思想の文脈で受容され得るという点でもまた、薦度齋の存続に大きく作用したものと思われる」[具未来2008:86]。

3. 「四十九齋保険」に関する調査から見た現状

3-1. 調査の概要

筆者が2006年2月にソウル市にある「普賢寺」を訪問した時に、住職から近年では「四十九齋保険」が登場しているという興味深い話を聞いた。その後、その「四十九齋保険」について調べ、2回の聞き取り調査を行った。

1回目は2008年11月19日、最初にこの保険を企画し実践したユ=ゼ Chol 氏から2時間にわたる聞き取り調査を行った。ユ=ゼ Chol 氏は、仏教信者や僧侶を対象にした葬儀社「蓮華会」の代表であり、東国大学校仏教大学院で外来教授として仏教の葬儀について教えている。また、2009年5月23日に亡くなったノ=ムヒョン前大統領の仏式の葬儀を施工した人である。

2回目は2009年2月11日、「四十九齋保険」の企画・販促担当者で、仏教テレビジョンの保険部門ビジネスチーム・マネージャーであるイ=スボン氏から約2時間の聞き取り調査を行った。さらに2010年1月12日に補足調査を行った。

主な質問内容は、次の4点である。

- ①経緯：「四十九齋保険」の経緯
- ②背景：どのような背景をもって登場したのか
- ③加入者：親世代が自分のために加入するのか、子どもが親のために加入するのか
- ④寺院の意図：こういった商品を勧める仏教寺院の意図について

なお、以下に著述する調査結果でイ=スボン氏が保険加入者の現状についての詳細を「割合」で表現するが、これは厳密な調査データによるものではない。イ=スボン氏が、契約者数や契約者の年齢などといった大づかみなデータをもとに、相談や契約といった日常業務の中で実感している割合である。それには厳密性はないものの、四十九齋保険の傾向を知る上では十分なデータであると判断する。

3-2. 「49齋保険」の経緯

最初の「四十九齋保険」は、1999年に「教保生命」会社が、仏教信者を対象に葬儀を行っている葬儀会社「蓮華会」に提案し、共同でつくった保険であるという。名前は「49齋保険」となっているが、終身保険で、葬儀などのメニューも含まれている。仏教宗派ごとのカタログまでつくったが、うまく進展しなかった。その理由を「蓮華会」代表のユ=ゼ Chol 氏は「仏教テレビ局で引き受けてくれて宣伝までしたが、テレビ局に依存しすぎて、そのあと直接営業をする僧侶がいなく、フォローできなかった」と話す。そののち「興国生命」会社と「天台宗」が共同でこの保険を商品化した。しかし、これも2004年から2007年までの3年間で募集を終了することになった。相対的に小規模な天台宗の中だけで募集をしたため、加入者は約2000人であったという。そのほか49齋保険は「東洋生命」会社ごく小規模ではあるが商品化をしている。

このようにしてみると、日本でも同様なことが言えるが、同じ仏教といっても異なる宗派どうしが一緒になって行動する状況になく、まして僧侶は直接、信者に積極的に勧誘するような営業活動はで

きない。いわゆる販売システムが整っていなかったのが原因で、見込まれていた需要ほど契約に結びつかなかったということである。

しかし2008年、仏教テレビジョンのイ=スボン氏(保険ビジネスチーム・マネージャー)が再検討し、仏教テレビジョンでリメイクして、興国生命の「四十九斎保険」として募集を再開した。天台宗は相対的に規模が小さく、曹溪宗より経済性が低い。募集しても2000人ぐらいが限界で、その後の増加が見込まれないということで、市場マーケットを拡大するために、韓国の仏教信者全体を対象にしている仏教テレビジョンがこの分野に参入した。2008年4月から2009年1月の9ヶ月で1700人の人が加入したという。今までテレビの番組を通じて、保険の内容を説明してきた。これは非常に成果があった。そこで、仏教テレビジョンを通じて広告し、その後、契約にまでうまくもって行くことが課題であった。2010年1月の補足調査で、1年目にあたる2008年4月～2009年3月で加入者は4,050件、2010年1月12日現在の総加入者件数は7,500件で、順調に加入者数を伸ばしているようである。

3-3. 「四十九斎」の費用と保険金

本来、四十九斎は七七斎ともいって、死後七日ごとに七回祭祀を行うのであるが、日本の多くの地域では最初の7日と49日目だけに儀礼を行っている。韓国では死後7ごとに7回、49日まで祭祀を行い、最終の四十九斎を一番盛大に行っている。6回目までの祭祀の費用は1回が30万～40万ウォン(約2.4万～3.2万円)で、6回分は最大で240万ウォン(約19.2万円)になる。最後の7回目の祭祀は1回で200万～300万ウォン(16万～24万円)かかる。実際には、これらはお寺に支払う費用であるが、そのほか祭祀膳の用意が必要なので、そういった費用もかかる。かつて韓国では3年目で「脱喪」していたが、今は四十九斎で「脱喪」という形が多くなってきている。したがってお寺に500万ウォン支払ったとしても、儒教式の伝統的な儀礼を何回か行うよりずっと費用は少なく、費やす労力も少なく済むということになる。

「49斎保険」は1000万ウォンの保険金で、保険に加入して2年未満であると死亡受取金が500万ウォンであり、加入して2年以上であれば1000万ウォンが加入者に支払われる。韓国の葬式(喪礼または葬礼というが)の費用は500万ウォンなので、1000万ウォンの保険に入っておけば、葬式と四十九斎の費用がまかなえることになる。

3-4. 「49斎保険」登場の背景

1999年に「49斎保険」が登場したが、保険の企画者であるユ=ゼ Chol氏は、その背景に「寿命が延びて、無縁故の年寄りが増えている」ことをあげる(下記参照)。さらに興味深いことに、パンフレットに「僧侶、無縁故老人仏教信者様らのための、老後の生活費・病気治療費の必要性増大」とあり、「僧侶」も対象となっている。実際に加入者の約1割が僧侶を含む寺関係者であるという。日本と違って韓国仏教は、太古宗など一部を除き僧侶は妻帯しないし、日本の檀家制度のような寺院の経済基盤があるわけではない。そこで、こういった保険の対象に僧侶や寺で働く人々が対象となっている点が、日本との違いで興味深かった。日本の寺院は、宗門内では寺の後継者問題をあげながらも、信者に対しては「永代供養墓」などといった「家族による継承を前提としない墓」をつくって、子どものいない夫婦や単身者(いわゆる無縁故者)の死者供養を寺が保障するシステムを提供している。僧侶が結婚し

家族を形成している日本では僧侶の葬儀や供養の心配はされていない。

[ユ=ゼ Chol 氏]

寿命が延びて、親戚が無い、無縁故の年寄りの信者が増えてる。それが一番の理由。その次にお坊さんが無縁故。そういう年寄りの仏教信者のために老後生活費用、病気の治療費の必要性が増大した。

[教保生命と蓮華会の「仏教式葬儀および49斎保険」のパンフレットより]

- ・ 寿命延長による親戚がない無縁故老人仏教信者様の増加
- ・ 僧侶、無縁故老人仏教信者様らのための、老後の生活費／病気治療費の必要性増大
- ・ 健康に対する保障はもちろん、余生の‘生活の質’の保障を受けることができない劣悪な環境
- ・ 僧侶らが安心して老醜生活を営める養老院、療養院、医療院などの福祉施設不足
- ・ 仏教界の老後福祉の問題は“一瞬に解決される事項でない”という認識拡充

3-5. 加入者と被保険者

寺院関係者以外の9割の人々について、加入者と被保険者の関係を聞くと、下記のように「本人が自分のために加入」するケースが約7割と圧倒的に多いことがわかった。儒教社会の韓国では子どもが親の死後の供養をあつくもてなすことが特徴とされていたが、すでにそういった特徴を揺るがす事態が起こっていることが想像できる。加入者の年齢は60歳代が多く、自分、配偶者、親のために加入するケースであるという。一方、40～50歳代の加入者は「親のために加入」する人が多いということであった。

- ①「本人が自分のために加入」約7割 ・ 60歳代は、自分、配偶者、自分の親のために加入
- ②「子どもが親のために加入」が約3割 ・ 40～50歳代とそれ以下は、子が親のために加入

3-6. 加入理由

「本人が自分のために加入」したケースと、「子どもが親のために加入」したケースについて、それぞれ、その加入理由を問うと、下記のような回答が得られた。

・ 本人が自分のために加入

- ①子どもに迷惑をかけたくない 約6割
- ②四十九斎は非常にお金がかかるので、そのために貯蓄する 約2割
- ③子どもが四十九斎を行うことを認めてくれない 約2割

・ 子どもが親のために加入

- ④親が死亡すると、急に相当な金額のお金が必要となるので、事前に少しずつ準備しておこうという経済的な配慮。
- ⑤親孝行のために加入する。

②「四十九斎は非常にお金がかかるので、そのために貯蓄する」(約2割)という理由は、高額でしかも予測困難な出費に対して、経済的な備えとして加入することはむしろ保険の本来的な意味がそこにあるといえるだろう。がしかし「本人が自分のために加入」した人の一番多い理由が①「子ども

に迷惑をかけたくない」(約6割)であったことに注目したい。

伝統的に子どもが親の死後の祭祀を行うのは当然であった社会で、そのような儒教の「孝」の規範が薄れたためなのか、「迷惑をかけたくない」といった遠慮がちな親の態度がうかがえる。しかしごく少数であるが「親孝行のために加入する」という子世代の加入者があることが「孝」がまだ完全に希薄化したわけではないことを物語っている。

そしてさらに注目したいのは「子どもが四十九齋を行うことを認めてくれない」(約2割)という人々の事情である。それは「親と子の宗教が違う」「子に信じる宗教がない」「宗教は同じであるが、子どもが四十九齋を行うことに理解を示してくれない」などである。

その背景に、韓国仏教が日本のように「家」を単位とした宗教ではないことがあげられるであろう。つまり家族が単位でないということは、世代間の宗教的つながりはなく、親からすれば親の宗教で祭祀される保障がないということにもなる。聞き取り調査でも「四十九齋について特にいえることは、世代別にその認識が違うことである。韓国仏教の問題点の一つとして、世代間で信仰がつながっていないという特徴がある。家族にキリスト教信者もいる。キリストの場合は、親が子どもの手を取って教会に行くので、自然に親の宗教の影響を受けているが、仏教の場合はそれができていない」(イ=スボン氏)。したがって仏教では子どもが四十九齋を100%受入れているとは限らないというのである。家族のメンバーが信仰が違うことによって、死者祭祀における宗教的自由が危ぶまれる場合があるという。「特に新しい家族、いわゆる息子の妻、娘の夫とは異質な面もあり、子どもは親の宗教を100%受け入れていない」(イ=スボン氏)という心配が、背後にあるのだという。

3-7. 寺の経済基盤

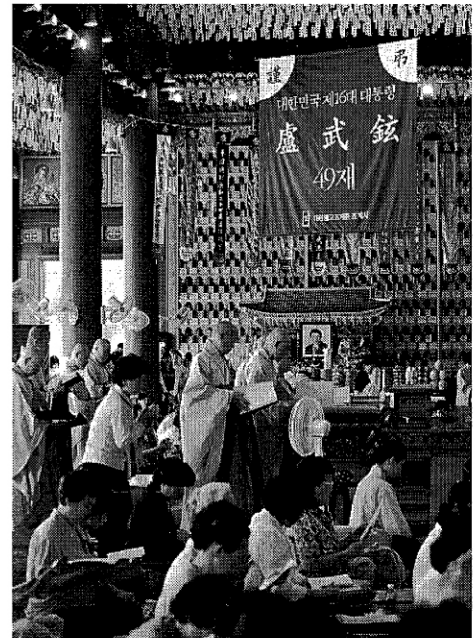
現在、僧侶がこの49齋保険を積極的に仏教信者に勧めているそうだが「それは宗教的なことよりも経済的な理由である」とイ=スボン氏はいう。すなわち「未来の利益を保障するものである」との見解である。日本のような檀家制度がない韓国では、特定の信者を一寺院でつなぎ止められているわけではない。したがって49齋保険は、一般的な保険の概念を外し、小額にして負担を少なくし、加入しやすいようにして、「お寺と人々をつなぐ」という意図で作ったという。

ところで檀家制度を持たない韓国では、人集めのための大きな行事がよく行われている。例えば2009年7月10日には、ノムヒョン前大統領の四十九齋が、遺族が主催する以外に、全国の仏教寺院で催された。ノムヒョン前大統領を追悼したいと思う国民は、近くの宗教施設が主催する前大統領の49齋に参加する。実際、各地の寺では「ノムヒョン前大統領49齋」の横断幕が張られ、2009年7月10日当日には全国各地で10万人の国民が参加したという。また韓国の仏教行事は、人を集めやすいように、複数の行事を抱き合わせで行うことも珍しくない。長安寺ではノムヒョン前大統領49齋と預修十王生七祭を抱き合わせで行事を行った。

さらに興味深いのは、寺では人間の四十九齋だけではなく、非人間、たとえば建築物などの四十九齋も行っていることである。朝鮮日報は2008年2月18日の記事で、国宝の南大門が火災で消失したため、その南大門の四十九齋を洛山寺(江原道襄陽郡)で営む予定であるという予告記事を掲載している。宗教法人・洛山寺の総務担当僧侶は、「四十九齋は基本的に衆生(命あるもの、特に人間を指す)のための法要だが、崇礼門(南大門)に対する追悼の念が全国的に広がっていることを考慮した」と



写真① 長安寺では、「預修十王生七祭 並び ノ＝ムヒョン前大統領49齋」と書かれた横断幕が掲げられていた(2009.7.1)。



写真② 曹溪寺(ソウル)で営まれた「ノ＝ムヒョン前大統領の49齋」



写真③ 各地域で「ノ＝ムヒョン前大統領の49齋」が超宗教で開催された。写真は忠清南道錦山郡にて撮影。僧侶も牧師も参加している。

語ったとある。「四十九齋には消失前の崇礼門の写真が遺影として使われる。洛山寺は参加対象者を特に限定しておらず、出席したいという人は受け入れる方針だ」と報じている(イ＝ヒョクチュエ記者)。実はこの洛山寺も2005年4月に山火事に遭い、法堂や宝殿、それに宝物に指定されていた銅鐘などを消失して、数年にわたって再建工事がつづいているという。再建工事資金が必要な寺が、消失した南大門への人々の追悼の思

いに添って四十九齋を行なうというのである。檀家制度を持たない韓国仏教は多くの人を集める行事で参加費を集めている。そこで行われる仏教儀礼には見応えがなければならず、韓国仏教は大変、芸術的要素の高い儀礼が現在でも存続している背景が見えてきたように思う。つづいて、その芸術性の高い伝統的儀礼の一つ「預修齋」を紹介することにしたい。

ここでは紙面の制約上、「預修齋」における宗教的な変遷をたどるのではなく、韓国に今も残る預修齋という伝統的儀礼を紹介するにとどめることをまずことわっておくことにしたい。最初に現代の韓国で預修齋はどのように説明されているのか、インターネット上のWebサイト(①百科事典 EnCyber (Yahoo KORIA)、②長安寺(単立法人)の2009年の預修齋告知、③法王寺(曹溪宗)の2009年の預修齋告知を見ていきたい。それは韓国における預修齋の意味を正確に知ることが目的ではなく、現代韓国社会で預修齋がどのように説明されているかを知ることには力点がある。そして次に預

修斎の式次第について紹介し、最後に、筆者が参与観察を行った奉元寺（太古宗）の事例からその預修斎に参加する人々の実際に触れる。

4. 現代韓国にみられる「預修斎」

4-1. 「預修」の意味

預修は文字通り、生前に功德を積み、死後に極楽往生を可能にさせるという信仰に基づいてなされる。それは死後に返さなければならない借金と果報を、あらかじめ（預）返して（修）、死後の福田を拓くための儀礼で、生前預修斎、あるいは預修十王生七斎とも呼ばれている [李京燁2007: 419]。

韓国のWebサイト上の百科事典EnCyber (Yahoo KORIA) では「預修斎」について、そのはじめに次のように記されている。

「寺刹で行う斎の式の一つ。死後に極楽往生するためにあらかじめ斎をあげて功德を積む意識で、道教の十王信仰が仏教に収容されたのだ。死後に冥府の十王たちから審判を受ける時、極楽へ行くことができるようにしようというところに目的がある『預修十王生七斎儀』という文献に根拠して、多神教的な傾向を見せる。特に冥府十王とその眷族に対する儀礼が多くて、地藏信仰とも関連が深い。また、斎を受ける空間（領域）を構成する方法では、密教的な面を発見することができる」とあり、中国より伝わった伝統的な『預修十王生七経』に依る内容が解説されている。

「長安寺」の2009年の預修斎を告知したWebサイトでは「インドのビムビサラ王、中国の唐太宗、新羅の善徳女王、朝鮮王朝の世宗大王らは、国が乱れた時に王になって、皆が太平聖代を作って、国を導いて行った方々です。これらは皆、在世時に国と国民らのために閏年に生前予修斎を奉行しました」と、この斎の伝統的な権威付けをしている。

また長安寺Webサイトでは、預修斎の意味を「圓覺經普眼菩薩藏を見ると、生きている時に私の罪をあらかじめ洗って極楽往生するということが生前予修斎の真の意です。先祖や靈魂のために行う薦度斎が人のためにする斎ならば、生前予修斎は自分のための斎です。自分の49斎を生きている時、自分があらかじめ行うことだと思えば良いです」と記している。

一方、法王寺Webサイトでは、自分だけでなく「自分の親兄弟、子どものための49の斎を前もってやっていくことです」と、その範囲を広げている。また「死んだ後7斎をやって極楽往生を発願する方法もありますが、死んでやるよりも、生きているときに本人が直接7斎をやると功德がより大きい」というように、預修斎の優位性を語っている。

4-2. 祭壇

百科事典EnCyberでは、「三身仏を法堂内側正面に仕えて、その東に地藏壇、西の方に호법선신（四天王・筆者注）中壇を置く。法堂外には冥府十王壇を仕えて、法堂東に下壇位、西の方に醜陋壇を置いた後、その下に庫司壇、従官壇、馬廐壇を順に作る。壇を設置したら、供養と礼敬意識をあげるのに、経を読み、布施をする」と記されている。

4-3. 生前の借金を返すこと

本論文の序章であげた『預修十王生七経』では、齋の具体的な内容として「讃」で次のようにいっている。

「善男善女、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の人々で、生前に生七齋を行なっておこうとする者がおれば、毎月二回、三宝を供養し、十王に姓名を伝え、文書を作って、六曹に奏上するように。善業童子が、それを天曹や地府などの役所に奏上して、名簿の上にそれが記録される。死後、そうした役所におもむいた際には、すぐさま快樂なところに生まれかわらされ、中陰に四十九日も留まることなく、息子や娘が追福供養をして、無事に十王のもとを通過できるようにと祈る必要もない。しかし、齋を一つ欠くごとに、十王の内に一人のもとに留められて苦しみを受けることになり、生まれかわりの時期が一年間ずつ引き延ばされることになる」。

これを見ても分かるように、「齋」として要求されていることは、「毎月二回、三宝を供養し、十王に姓名を伝え、文書を作って、六曹に奏上する」とあるが、法王寺Webサイトでは「私たちが簡単に忘却した過去にはあまりにも多くの借金が積まれています。予修齋を行って、今生に犯した罪業と未来に作ることになる罪業に対してもあらかじめ懺悔する時間を持って、自分の力で福を創造して下さい」とあり、生きているときの業罪とは「借金」といった具体的な対価で表現されている。

「百科事典EnCyber」では、『預修天王通儀』にある負債の返す方法として、次のような説明がなされている。「一つ興味深いことは、生年月日によって返済しなければならない負債（借金）が異なっているということだ。例えば甲子生は5万3千グアンを返さなければならないし17冊の経典を読まなければならない。負債（借金）をする所も決まっています冥府の三番目の六曹官に納めなければならない。もちろんこの時の負債は象徴的なものである。この齋に、経典を読めば返すことができるようになって、必要な経典を買って仏壇にあげることで代わりをしたりする。自分が返さなければならない金額を十王前に捧げれば、二つの切れになった切符を受け、一つは自分が保管してから死んだあとを持って行くことで、他の一つはすぐに燃やす。死んだ後に持って行くことを金銀錢と呼ぶ。この来由が『預修天王通儀』という意識集に著われる」。(写真⑫⑮参照) このように「負債は象徴的なものである。この齋に、経典を読めば返せるようになって、必要な経典を買って仏壇にあげることで代わりをしたりする」とある一方で、「返済しなければならない負債（借金）」についても触れている。

4-4. 日程と参加費

儀礼は、午前9時30分～午後5時30分ぐらいまでかけて1日で終わらせる寺から、生前に行く四十九齋（七七齋）という考えから、「入齋」のあと7回にわたって行う寺もある。参加費は「同賛金」と呼ばれ、長安寺では「1家族当たり30,000ウォン、靈魂1位当たり3,000ウォン」である。法王寺の同賛金は5万ウォンで、7回の齋が営まれた。筆者が参加した奉元寺では、齋は1日だけで、特別齋者は10万ウォン、一般齋者は1万ウォンであった。ただし、これは参加費であるので、このほか齋の最中に、何度かお金の布施をする場面がある。

5. 奉元寺（太古宗）の預修斎

5-1. 預修斎の式次第

「預修斎」は、寺の行事として一般的には閏月に行われている。筆者は2009年7月2日に行われたソウル特別市にある奉元寺（太古宗）⁹⁾の預修斎に参加し参与観察を行った。平日集まった約300人は9割近くが女性で、朝から夕方まで儀式が繰り広げられた。その式次第は以下の通りである。これは、長安寺で作成している生前預修斎のパンフレットに書かれていたものであるが、奉元寺の一雲住職によると「予修斎意識集」によって行事をするため、どの寺も同様の式次第になっているとのことである。ただ地域によって音の高低や出し方が違っていて、これによって時間が短縮される場合もあるとのことであった。

★生前予修斎の式次★

10:30 侍輦・・・一柱門前の侍輦する場所	2:30 回心曲・・・・・・・・・・使者壇
11:00 対霊・・・・・・・・大雄殿	2:40 使者奉送・・・・・・・・・・使者壇
11:10 灌浴・・・・・・・・大雄殿	3:00 運數上壇勸供・・・・・・・・野外法席
11:30 造錢點眼・・大雄殿	3:30 中壇（十王廳）勸供・野外法席
11:50 神衆作法・・野外法席	4:20 祝願和請・・・・・・・・・・野外法席
12:10 掛佛移運・・野外法席	4:30 庫司壇勸供・・・・・・・・庫司壇
12:20 靈山作法・・野外法席	4:40 馬廐壇勸供・・・・・・・・馬廐壇
12:30 昼食供養・・野外法席	4:50 施食・・・・・・・・・・野外法席
1:30 通序因流・・野外法席	5:00 拜送・・・・・・・・・・野外法席
2:00 使者壇勸供・使者壇	5:30 予修斎回向・・・・・・・・道場

5-2. 儀礼の内容

長安寺で作成している生前預修斎のパンフレットには儀礼の内容が記されているので、ここに紹介しておく。

- 【侍 輦】斎を行う道場に仏菩薩、擁護聖衆、靈魂を奉請する儀式で大衆が風を持って解脱門の外の侍輦する場所に行って南無大聖引路王菩薩の引導で斎道場にむかえてくる儀式
- 【対 霊】儀式道場に迎えてきた魂に簡単な接待をして仏菩薩殿に進む準備をする儀式
- 【灌 浴】仏の殿に進む前に娑婆世界で作った貪瞋癡、いわゆる三毒で汚した体と心の業をきれいにする儀式
- 【造 錢 點 眼】冥府世界で使われる金銀錢を點眼（生命力を入れる・筆者注）する儀式
- 【神 衆 作 法】仏法を擁護する神衆聖賢を呼んで迎えて今日の行事が円満成就されることを願う儀式
- 【掛 佛 移 運】特別に道場に壇を設置して仏様を迎える儀式
- 【上 壇 勸 供】仏菩薩を呼んで、供養を上げて婦依の札を尽くした後、願いを申し上げて加被力を受けることを発願する儀式
- 【通 敍 因 由】今日預修斎を行う本来の理由を知らせて大きな信心で発願する儀式

【使者壇勸供】 私たちのすべての業を管掌する年直、月直、日直、時直使者を呼んで、供養を伝える儀式

【回 心 曲】 私たちの業障を懺悔して信心を発願して、修行もして往生極楽を発願する儀式

【雲 水 上 壇】 運數上壇に仏菩薩を呼んで礼を尽くして、供養を上げて今日齋の内容を詳細に明らかにする儀式

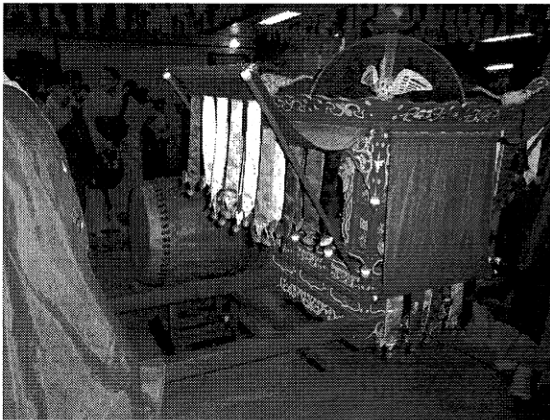
【中 壇 勸 供】 冥府十王の功德を讃嘆して行う儀式

【庫司壇勸供】 コジュ、クワンサ（使者・筆者注）など冥府の管理を求めて、供養を上げる儀式

【馬廐壇勸供】 冥府に従う雲馬、駱駝（ラクダ・筆者注）などに対する供養を薦める儀式

【拜 送 回 向】 齋を全部終えて、すべての仏菩薩、擁護聖衆、靈魂を奉送する儀式
燒臺に達して回向する

■奉元寺の生前預修齋



写真④ 侍輦／霊を出迎え、この「輦」に載せて連れてくる。



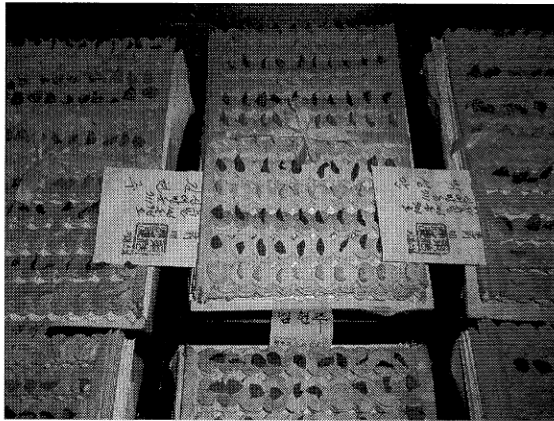
写真⑤ 預修齋の儀式を行う法堂。中央に仏像を安置。参加者は圧倒的に女性が多い。



写真⑥ 紙位牌と祭壇



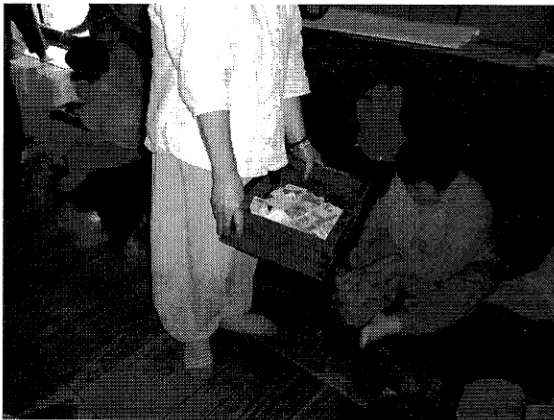
写真⑦ 生前に自分の冥福を祈って行う行事だが、みな故人を祀っている。



写真⑧ 紙札の束。住所・氏名が書かれた封筒が挟まれている。



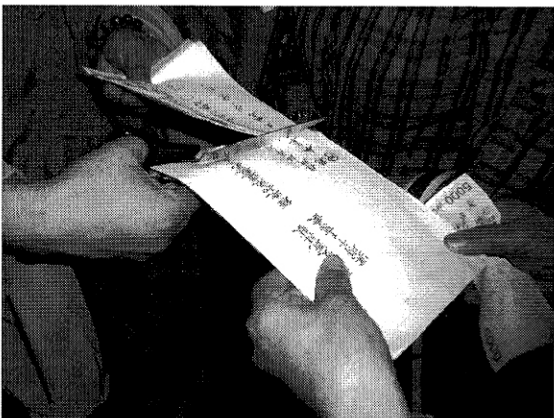
写真⑨ 僧侶の読経。後方には楽器で音楽を奏でる宗教者がその出番を待っている。



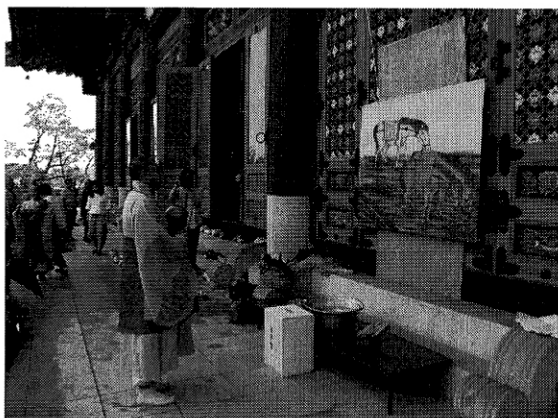
写真⑩ 儀礼のなかで、何度か布施（お金を）を集める場面がある。



写真⑪ 法堂外の冥府殿には十王が安置されている。



写真⑫ 紙札の束に入っていた住所・氏名が書かれた封筒は、儀礼の最後のほうで二つに切られ、一方は参加者が持ち帰って死んだときに冥府へ持って行く。もう一方は儀礼の最後に焼いて先に冥府に送る。故人が冥府に行ったときに持参した封筒の一方と合えば、生前に功德を積んだ証拠となる。このときも布施（お金）を渡していた。



写真⑬ 馬廄壇を設け、冥府に従う馬等に供養を促す。



写真⑭ 参加者は紙札の束を頭に載せて、寺院境内を歩く。



写真⑮ 最後は紙札の束と2つに切った封筒の一部を燃やして冥府に送る。

5-3. 儀礼の意味と参加理由の乖離

これまで預修齋は「生前預修齋」ともいわれるように、生前に自分の死後の極楽往生を願って行う祭祀であることを確認してきた。したがって祭祀の主体は自分自身であるはずだが、預修齋の会場に安置された紙位牌には「先父」「先母」などと書かれ、故人が対象となっていた（写真⑦）。さらに参加動機もまた、三人の参加者からの聞き取り調査では、みな「家族員のため」と答えた。その結果は次の通りである。

- ①【78歳女性】15歳の時にソウルに出てきて、現在は娘とペットと暮らしています。28歳の時に夫が他の女性とのところに行ってしまった、悲しいことがありました。30歳の時からこの寺に來ています。この寺が一番好きです。3年ごとに來て預修齋への参加は7, 8回になります。参加理由は、健康面によい精神的に樂になって、安心感が出てきます。いくら忙しくても來ています。
- ②【57歳女性】バスで1時間のところから來ました。このお寺に通い始めて28年が経ちました。3年ごとに行われている預修齋にずっと続けて來たので、参加した回数は覚えていません。預修齋に参加していて良かったと思えることは、私の家族は息子が2人、娘が1人いますが、全員大学を卒業し、就職もできた。私のお父さんもお母さんも高齢だけれど健康で、樂で幸せな生活ができています。それが良かったと思います。子どもは大学を卒業しましたが、まだ結婚はしていない。韓国の經濟状態が悪いので、こういう行事に参加していれば、悪いことはない、良いのではないかという気がします。預修齋だけでなく、1000日間、朝5時と午前10時に、大雄殿で祈りを捧げています。7月末までは觀音会の総務局長をやっていました。
- ③【45歳女性】毎日お寺に來て、祈りを捧げています。このお寺と縁ができたのは1998年で、夫のために通い始めました。2002年度から100日お祈りを捧げているのは私の息子のためにです。100日、朝5時と10時にお寺に來て祈りを捧げています。今日の預修齋は、私の夫のために、100日は息子のために。夫では、まず健康のため、また職場で働いているので、良い縁ができて出世できるように。息子の場合には、これから就職しなければならないので、就職のこともお祈りしています。私の親も仏教信者で、結婚後も夫の両親も仏教信者、小さい頃から仏教

の環境がありました。

預修齋は生前に功德を積んであの世に振り向けるという伝統に則った儀礼であるが、聞き取り調査をした三人の女性からはみな、本来の意味ではなく、健康・出世・就職祈願など現世利益的な参加理由が返ってきた。潭陽水晶寺における預修齋について紹介している李京燁は「信徒たちは預修齋に積極的に関与し、預修齋を通して現世での福楽と極楽往生とを祈願した」「老人の参与が目立ち、家族の福楽と孝行を実現するための目的が強調されるという点も注目される」と記している〔李京燁2007：423〕。

さらに李京燁は、韓国仏教は教理と実践が乖離した「祈福仏教」だとする仏教学界の一般的見解を紹介しつつ、しかしそれを、出家者によって修行されてきた仏教儀礼に対して、「仏教民俗」という概念で位置づけている。すなわち、僧侶たちの修行や教理体系に対する知識と違った、民衆に受容され、信仰されている仏教の意味である。在家信徒たちは、仏教儀礼を通して現実的な問題を解決しようとし、現実的な苦痛と葛藤から抜け出して、現世利益的な生の安らぎを得ようとする。先祖の靈魂を救済するための齋供養は、極楽往生を目的にしているが、これは一方で、子孫たちの持つ現世的な生に対する期待と欲望でもあるので、現世利益的な脈絡の上にあるものと見るべきである〔李京燁2007：414-418〕と考察を加えている。

6. 結論

農業が中心で親族の多くが同じ地域に住んでいた時代では、儒教に基づいた手厚い伝統儀礼は容易に営むことができた。しかし高度経済成長によって社会変動が起きた現代社会では、複雑な儒教儀礼はその生活から遊離したものとなり、現代人は新たな生活様式に適合した儀礼を模索している。死者儀礼の簡素化は韓国政府も推進している。しがたって政府の方針という大義名分を持ちながら、しかし親を手厚くもてなすという「孝」の意識もなくなったわけではない。そういった中で、脱喪儀礼をどの時期に設定するか、言い換えれば、生活実態に合った簡素化と孝意識との整合性をどこでつけるか、宗教的多元性をその特徴としてもった韓国社会で、死者儀礼のあり方が状況的適合的に変化をみせていることがわかった。

■状況的適合的变化

伝統的な3年喪はほとんどみられなくなり、葬儀だけで、直後の虞祭を行わないか、3回の虞祭を1度で済ませて脱喪とするケースも増え、さらに小祥や大祥は、行ったとしても2つ合わせて「小・大祥」として一周忌の祭祀を済ませる人々などが出てきている。そのような中で、三虞祭の脱喪では早すぎるし、百日までは負担が大きく、四十九日がちょうど遺族の心理に適合した脱喪儀礼として選択されるようになった。それも仏教の服喪期間である四十九齋に着眼して寺で祭祀を行えば、儀礼期間の短縮、儀礼の回数の縮小、接待費用の節約、費やす労力の縮小ができるのである。日本社会でも死後7日目に行う「初七日」を、葬式が終わったその日に行ってしまう地域が一般的になってきた。その理由は、遠くの親戚が何度も集まるのは大変であるからだという。

■四十九日にみる脱宗教化と「習合」

韓国における「四十九日」は、脱宗教的に韓国人一般が行っていることが非常に興味深い。仏教が国家宗教として用いられた高麗時代が去り、儒教を国家形成理念とした朝鮮時代に仏教は弾圧されとはいえ、長い間に浸透した仏教思想の土台のうえに儒教式儀礼が乗ったに過ぎず、儒教儀礼では満たされない精神分野の儀礼が生き残っていてもおかしくはない。具未来は、朝鮮時代に「新しい価値理念として導入された儒教の死生観が、民間の本源的欲求である来世観を提示できなかったことにより、仏教の救済思想が儒教の埋めることのできなかった宗教的欲求を充足させるのに、依然として有効であった」と分析し、さらに「死者を供養する薦度斎が儒教の祖先崇拜、および孝の思想の文脈で受容され得るという点でもまた、薦度斎の存続に大きく作用したものと思われる」という見解を示している〔具未来2008：86〕。筆者が調査中、今は一般用語になっている韓国語に、仏教が語源の言葉が多いことに気づいた韓国人が、あらためて韓国人の文化の土台に仏教の影響があることを知るという場面に出会った。基底文化となった仏教文化が現代人にはそれと意識されずに伝わってたりする様子をうかがうことができた。

儒教儀礼にある百日・小祥・大祥の時期は、仏教と道教の習合をみた『預修十王生七経』にある仏教儀礼の百日、一周忌、三回忌に等しい。正覚は、儒教のそれは、仏教と道教が習合した形式と理解することもできるであろうといい〔正覚 2008：119〕、また道端良秀のように、七七斎が斎を展開していく過程は、仏教と儒教の結合を見せてくれる良い例であるとする見解もある〔道端1960:1-17〕。さらに小南一郎は、中国古来の3年を最長とする服喪制度の影響もあってか、道教の十王信仰との習合が見られると指摘する〔小南2000：182-184〕。いわゆる儒教、道教、儒教の「習合」がみられるのである。

■個人の宗教と世代間関係

「49斎保険」調査からも興味深い知見が得られた。「49斎保険」の企画者は、保険登場の背景に親族のいない無縁故者の増加をあげている。僧侶や寺関係者も無縁縁故者の対象となって49斎保険が登場したことは、ほとんどの僧侶が妻帯し寺が世襲で継承されている日本仏教にない特徴として興味深いものがあつた。

「49斎保険」の加入者は「本人が自分のために加入」するケースが約7割と多く、その理由では「子どもに迷惑をかけたくない」が約6割を占め、そしてさらに注目されるのは「子どもが四十九斎を行うことを認めてくれない」(約2割)という理由であつた。後者は具体的にいうと「親と子の宗教が違う」「子に信じる宗教がない」「宗教は同じであるが、子どもが四十九斎を行うことに理解を示してくれない」などが具体的な理由であるという。

約2割の人々が加入理由を「経済的な備え」としている。そこには保険本来の意味があるが、子が親に祭祀をもてなすことが規範化されている儒教社会で、「親本人が自分のために加入」したことは、一つに「孝」の思想の希薄化を意味するといえるのではないだろうか。しかし少数であるが「親孝行のために加入する」子世代の存在があり、「孝」の意識がまだ完全になくなったわけではないことを物語っている。

「子どもが四十九斎を行うことを認めてくれない」(約2割)という回答は、韓国仏教が日本のように「家」を単位としていないことも関係しているであろう。イ＝スポンは「世代別にその認識が違い、

世代間で信仰がつながっていかない。特に息子の妻、娘の夫とは異質な面もあり、子どもは親の宗教を受け入れていない」という心配が、背後にあるという。世代間の宗教的つながりは薄くても、これまでのように「孝」意識が強くあれば親の意見は絶対視されてきたが、それが薄れたとき、親が自分の宗教で祭祀される保障も薄れている。

それでは檀家制度をとってイエの宗教として推移してきた日本仏教は、子どもによる親の祭祀は安泰かという、そうでもない。伝統的に子どもはイエの宗教で親の死者祭祀を行ってきた。したがって相対的に韓国よりは親の宗教で祭祀される可能性はまだ高いが、しかし現代社会にあつては、それも盤石ではない。日本ではイエ意識が希薄化して、死者儀礼を無宗教で行うと人が増えている。

■現世利益を志向する在家仏教信者

「生前預修斎」を通して見えてきたことは、生前に自分の死後の極楽往生を願って行う祭祀であっても、預修斎の会場に安置された紙位牌には「先父」「先母」などと書かれ、故人が対象となっていた。さらに参加者の動機もまた、夫や子どもといった家族の健康・出世・就職祈願など現世利益的なものであった。そこには出家僧たちの修行や教理体系に対する知識とは違った、民衆に受容され、信仰されている「仏教民俗」の存在があり、先祖の靈魂を救済するための斎供養は、極楽往生を目的にしているが、これは一方で、子孫たちの持つ現世的な生に対する期待と欲望でもあるので、現世利益的な脈絡の上にあるものと見られている〔李京燁2007：414-418〕。

また『四十九齋와 孟蘭盆齋에서의 遺族心理治癒에 관한 研究』(博士論文2010年2月)を執筆したイ=ボンスによると、『地藏菩薩本願經』の中に説かれている功德の配分、すなわち斎を行えば7分の1が死者へ、7分の6が生者へふり向けられるという内容が、韓国の仏教信者のあいだでは常識となっているということである。したがって、もともと死者のための四十九齋であっても7分の6の功德が生者にふり向けられると考えるわけであるから、それが生前預修斎においても同様な意識をもっていることがわかる。

■檀家制度をもたない韓国仏教の特徴

韓国の寺で行われている薦度斎は、非常に芸術性の高い伝統儀礼であり、単独で行われることもあるが、しばしばほかの儀礼と抱き合わせで開催されることも少なくないという。たとえば巫俗のクツが同時に行なわれなど、これは寺の運営のために様々な思いをもつ参加者を少しでも多く集め、感動を与え、見物するに足る行事であり続けることが必要であったから、という一側面も考え得るだろう。その一方で宗教的多元性、宗教的寛容といった特徴も見えてくる。

さらに韓国仏教では、人集めのための大きな行事がよく行われている。例えば2009年7月10日には、ノ=ムヒョン前大統領の四十九齋が、全国の仏教寺院で営まれた。各地の寺で「ノ=ムヒョン前大統領49齋」の横断幕が張られ、全国各地で10万人の国民が参加したという。さらに興味深いのは、人間だけではなく、焼失した南大門までが四十九齋の対象となっている。火事にあつて再建工事資金が必要な寺が、人々の南大門への追悼の思いに添って四十九齋を行なったのである。檀家制度を持たない韓国仏教は大規模な行事で「同賛金」を集め、儀礼時にも布施の場が設けられている。そこで行われる仏教儀礼には見応えがなければならず、梵鐘、音曲、舞といったように芸術的要素の高い儀礼が現在でも存続している背景が見えてきたように思う。日本のような檀家制度がない韓国では、一般信者には寺を護持する義務はない。したがって49齋保険は、小額保険にして負担を少なくし、加入しやす

いようにして「お寺と人々をつなぐ」意図で作られたという。

以上見てきたように、本論文では、高度経済成長による社会変動にともなって伝統的な死者儀礼がどのように変化したか、韓国における「四十九齋」と「預修齋」に着目して社会学的に考察した。一方でそれは別の課題を含んでいたことも述べた。すなわち中国の「死者供養」を源流にもつ東アジア仏教文化圏である韓国と日本の個別的な変遷を把握することで、檀家制度をもたない東アジア地域の仏教がどのような存続・展開してきたのかに着目し、運営基盤としての檀家制度が制度疲労を起こしている日本仏教の今後のあり方を模索することである。多くの人々を集める行事の開催、そして見応えのある芸術性の高い伝統儀礼を行って感動を与えるといったところに、その示唆があったように思う。本論文は日韓の比較研究の途についたばかりの筆者が、しかも社会学的アプローチでまとめたものである。よって今後さらなる研究を深めることを課題としている。

謝辞

韓国調査にさいして専門分からのアドバイスやご協力いただいた張萬石教授、李 亨雄氏、韓 瓊東氏、それに本論文執筆にあたって直接お会いし知識を教授してくださった皆様に、厚くお礼申し上げます。

注

- ¹⁾ 日本で刊行された書物の中では、韓国の預修齋の「伝統儀礼の実際」に関しての説明はあまりみかけない。李京燁が、日本で刊行された野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済－目連救母と芸能の諸相－』の中で「韓国の目連伝承と孟蘭盆齋」と題した論考で、全羅南道潭陽郡昌平面水晶寺で催された生前預修祭儀を紹介している。
- ²⁾ 「閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経」や「十王経」についての分析は、塚本善隆〔1975：315-399〕や小南一郎〔2000：159-194〕が詳しい。それによると、唐代後半期における「預修生七経」流行の様相は、敦煌莫高窟で発見された写本や十王を書いた掛け図などの絵画を通して具体的にうかがうことができ、この經典のテキストは、件数も多く、形態的にも多様で、内容にもバリエーションがある。しかし經典本文の他に、讃と図とが付属するものと、講と図がないものの2系統に分けることができる。本論文で参照しているテキストは『大日本統蔵経』に収められた、成化5年（1469）の後記を有する朝鮮刻本によったもので、經典本文の他に讃が付属する。朝鮮にはこの経の画入りの高麗版や、図のみから成る本があるという。
- ³⁾ 「若有善男子善女人、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、預修生七齋者、毎月二時、供養三寶、祈設十王、修名納狀、奏上六曹、善業童子、奏上天曹地府官等、記在名案、身到之日、便得配生快樂之處 不住中陰四十九日、不待男女追救、命過十王、若闕一齋、滯在一王、留連受苦、不得出生、遲滯一年、是故勸汝、作此要事、祈往生報」。要約すると以下ようになる。（もし、善男善女、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の人々で、あらかじめ生七齋を行なっておこうとする者があれば、毎月二回、三寶を供養し、十王に姓名を伝え、文書を作って、六曹に奏上するように。善業童子が、それを天や地の役所などに奏上して、名簿の上にそれが記録される。死後、そうした役所におもむいた際には、すぐさま快樂なところに生まれかわることができ、中陰に四十九日も留まることなく、息子や娘が追福供養をして、無事に十王のもとを通過できるようにと祈る必要もない。もし一つの齋を欠くごとに、十王の一人のもとに留められて苦しみを受けることになり、生まれかわりの時期が一年間ずつ引き延ばされることになる。これ故に汝に勧める、この要事を行って往生することを祈りなさい。）

- 4) 「爾時佛告阿難、一切龍神八部、及諸大臣、閻羅天子、大山府君、司命司録、五道大神、地獄官等、行道天王、當起慈悲、法勿有慢、可容一切罪人、慈孝男女、修齋造福、薦拔亡人、報生養之恩、七七修齋造像、以報父母、令得生天」。要約すると以下ようになる。(仏陀は、阿難に告げた。一切の龍神八部衆、および諸大臣、閻羅天子、大山府君、司命司録、五道大神、地獄の役人たちは、慈悲心を起こして、すべての罪人を受け入れてやるように。孝行な息子や娘が齋を行い、福を作って、死者を苦しみから救い、育ててくれた恩に報いるため、七七日に齋を行ない、仏像を作ったときには、天に生まれかわらせてやるように、と)。
- 5) 随所に「七言四句」で、第一、第二、第四句の末字が韻を踏む「讃」が置かれる。
- 6) 韓国の高麗時代について正覚が次のように記している。「金溝 金山寺 慧徳王師 真応塔碑文」の中に「高麗の肅宗元年(1096)12月18日の王師が臨終するや…初七日より小祥・大祥など概ね十斎(初斎・二斎・三斎・四斎・五斎・六斎・七斎・百日斎・小祥・大祥)に至るまで…」(『自初七泊二祥凡十斎』『朝鮮金石総覧(上)』P.301)などの表現があり、高麗末期から十王信仰と関連した道家的理念が、仏教の祭礼説行時期の例として執り行われていたことが分析される[正覚2008:120-121]。
- 7) 脱喪儀礼として儒教では、喪礼(葬式)が済んだ後に行う3回の祭祀「虞祭(ウチェ)」がある。それは、喪礼の後に行う「初虞祭」、喪礼の翌日行う2番目の祭祀「再虞祭」、喪礼の翌々日に行う「三虞祭」である。
- 8) 仏教関係者による仏教に特定された媒体の記事であるため、他宗に気遣って「隣り宗教」などといっているが、こういう言い方をした場合、プロデスタントとカトリックを暗に指しているということである。
- 9) 奉元寺は新羅51代(西暦889年)眞聖女王3年に道洗国師が現在の延世大学校の地に建てた寺である。近世・朝鮮時代第21代英祖大王24年(西暦1748年)に讃汁・増嚴の二名の禪師が延世大学校の地から少し離れた所に移して新しく建てたので、セジョル(新しい寺)と呼ばれている。現在、奉元寺は韓国仏教の伝統宗団である太古宗の総本山で、伝法修行の脈を受け継ぎ、仏教芸術を伝承・継承している。僧侶は60人で、信者は約10万人と公表されている。また韓国仏教芸術の精神的指導者である重要無形文化財第五十号(梵唄)の朴松岩師(2000年2月入寂)や、仏教美術の丹青重要無形文化財第四十八号の李萬奉師が所属されている伝統的寺院でもある。

【参考文献】

- 朝倉敏夫 2007「韓国祖先祭祀の変化—都市アパート団地居住者を中心に」国立民族学博物館研究報告 13 巻4号 pp741-786
- 正 覚(チョンガク) 2008「仏教祭礼の意味と行法—施餓鬼会を中心に」韓国宗教民俗研究会編『韓国の宗教と祖先祭祀』岩田書院 pp105-141
- 具 未来(グ=ミレ) 2005『‘四十九斎’의 儀礼体系와 儀礼主体들의 죽음 認識』安東大学校博士学位論文
- 具 未来(グ=ミレ) 2008「仏教の薦度斎に投影された儒教の祭祀理念」韓国宗教民俗研究会編『韓国の宗教と祖先祭祀』岩田書院 pp71-103
- 秀村研二 2007「韓国社会における死をめぐる民俗文化の変容」朝倉敏夫・岡田浩樹編『グローバル化と韓国社会—その内と外』国立民族学博物館調査報告書69 pp31-41
- 洪 潤植(ホン=ユウンシク) 1976『韓国仏教儀礼の研究』隆文館
- 川上新二 2007「韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き」朝倉敏夫・岡田浩樹編『グローバル化と韓国社会—その内と外』国立民族学博物館調査報告書69 pp43-63
- 金 美栄(キム=ミヨン) 2008「韓国人と祖先祭祀—儒教式祖先祭祀の社会性と宗教性」韓国宗教民俗研究会

- 編『韓国の宗教と祖先祭祀』岩田書院 pp103-103
- 金 文吉（キム=ムンギル）・芦名定道 「死者儀礼から見た宗教的多元性－日本と韓国におけるキリスト教の比較より」 pp5-23
- キム=ユシン 2008『仏教新聞』7月5日
- 小南一郎 2000『『十王経』をめぐる信仰と儀禮―生七齋から七七齋へ』『唐代の宗教』京都大学人文科学研究所研究報告 朋友書店 pp159-194
- 李 範壽（イ=ボンス）2010『四十九齋와 孟蘭盆齋에서의 遺族心理治癒에 관한 研究』東国大学校博士学位論文
- 李 京燁（イ=ギョンヨブ）2007『韓国の日連伝承と孟蘭盆齋』野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済－日連救母と芸能の諸相－』風響社 pp409-446
- 前田慧雲・中野達慧編 明治38～大正元年『大日本統蔵経』蔵経書院
- 道端良秀 1960『中国仏教と祖先崇拜』『仏教史学』9-1、仏教史学会 pp1-17
- R.ジャネリ、任敦姫 1993 樋口淳他訳『祖先祭祀と韓国社会』第一書房
- 高村竜平 2004 「済州島におけるセマウル共同墓地の設置と利用」『村落社会研究』第10巻、第2号、農山漁村文化協会 pp19-30
- 2006「墓を通じた土地と人の関係についての小論－韓国・済州島の墓地管理活動『伐草』の事例から」『言語文化研究』17巻3号 pp79-96
- 竹田 旦 1995『祖先崇拜の比較民俗学―日韓両国における祖先祭祀と社会』吉川弘文館
- 竹田 旦 2000『日韓祖先祭祀の比較研究』第一書房
- 塚本善隆 1975『引路菩薩信仰と地藏十王信仰』『塚本善隆著作集』第7巻、大東出版社 pp315-399

A Sociological Consideration of Contemporary Korean Memorial Rites — 49th Day Funeral Commemoration and Memorial Services Performed Before One's Death.

INOUE Haruyo

The aim of this paper is to consider, from a sociological focus on “Sasipku-je” and “Yesu-je” in contemporary South Korea, how traditional mortuary rites have changed in a society transformed by rapid economic growth. As for “Sasipku-je”, which is equivalent to the “49th Day Funeral Commemoration in Japan”, making use of existing scholarship, I will begin by trying to grasp transformations since the period of rapid economic growth. I will then consider this transformation through interviews regarding the recent “Sasipku-je insurance.” In addition, this paper will introduce the “Yesu-je”, a rite that has been passed down in South Korea but does not exist in ritual form in Japan. Finally, focusing on the distinct transformations in Japanese and South Korean mortuary rites, which both originate from Chinese “death memorials”, I will include a consideration of developments in South Korean Buddhism, which does not have a parishioner system.

Keywords : Change of the Korean Memorial Rites, Sasipku-Je, Yesu-Je, Syncretism

Journal of Human Life Design

NO.5

Contents

SHIMIZU Reiko Prefatory Note	5
Articles	
INOUE Haruyo A Sociological Consideration of Contemporary Korean Memorial Rites — 49th Day Funeral Commemoration and Memorial Services Performed Before One's Death.	7
IWAMOTO Hajime Zen and Health 1 — Hakuin's 'Naikan no Hihō' and 'Nanso no Hō' —	31
IWAMOTO Sayumi Research on current warm-up by high school and college tennis players. — in the case of the badminton —	41
KANEKO Motohiko Dynamic state of the hitting movement by all player's energy	51
KIKUCHI Noritaka Essai psychiatrique sur l'extase religieuse observée au travers d'un cas clinique de la Salpêtrière en la historia de la danza española	63
KIKUCHI Yoshiaki A Study on the trend of Specialization and Geographical Distribution of Foster Parents in Okayama Orphanage from 1914 to 1916	75
SHIGENARI Takeshi Study and Development on Wheelchairs and Seating System for the Elderly	109
TAKAHASHI Naomi An approach of Hashira (Pillar) thought drawn in "Gingatsudo no Yoru (Night of the Milky Way railway)"	125
NAKAMURA Fusayo, HISATA Hazuki, HONNA Yasushi Study of the related factor of care worker's job satisfaction in the nursing home	137
FURUKAWA Satoshi The effects of movement education and therapy for handicapped children on the mental state of mothers	157
LAMBERT Nicholas English for Careers in Sport: Learning by Doing	167
WAKABAYASHI Chihiro, SHIRAISHI Hiromi Mentally disabled family's realities and consideration concerning support — Activity in mentally disabled' daytime in the mentally disabled family association	181
Research Notes	
HASHIMOTO Yoshihiro "The school social worker project" in Saitama Prefecture — Analysis of "Active record of "The school social worker project""—	197
MUROI Yumi Present State and Problems of Medical Facilities of Child Life Specialists' work in Hospital	207
Research Project Reports	
AMANUMA Akihiko, KITA Shingo, TAKAHASHI Yoshiyuki, REE Hokyoo Study on Design of Rehabilitation Apparatuses Making Use of Haptic Devices	219
IKEDA Chitose, KUBOTA Hazuki, SUZUKI Tomoko, AMANUMA Akihiko Study of Intelligibility on Variation in Space Cognition Quality and Spatial Navigation Information	223
UCHIDA Toko, KIKUCHI Yoshiaki, FURUKAWA Kojun, SAKAGUCHI Masaharu, SUZUKI Tomoko Modern Roles and Significance of Settlement Activity in the Local Community	227
UCHIDA Yoshio, NATORI Akira, SYOZAWA Minoru Study on Possibility of Design Cooperation Between Architects and Backstreet Workshops Conceptualizing Volume-based Techniques	231
KIKUCHI Noritaka, SHIRAISHI Hiromi, INOUE Haruyo, IKEDA Chitose, KITA Shingo Life Design Approach to Diversifying Mental Crisis	235
SAITO Kyohei, TAKANO Tatsuaki, KOHNO Hiroshi Study on Revitalization of Local Organization Activities for Improving Community Health	239
SHIGENARI Takeshi, OZAWA Atsushi, YONEDA Ikuo Study on Development on Assistive Support for Positioning and Mobility of Clients with Severe Disabilities in the Facility	243
SUGITA Kiyoko, SHIMIZU Reiko Development of teaching methods for Cardiopulmonary Resuscitation skills	247
TAKAHASHI Yoshio, WATANABE Yumi, MIZUMURA Hiroko, YONEDA Ikuo Study on Development of Assistive Tools for Disabled Persons	251
TAKAHASHI Gihei, OSAKO Masafumi, YONEDA Ikuo, REE Hokyoo, SYOZAWA Minoru Study on Development of the Universal Bathroom in Hotels and Ryokans (Japanese-style hotels)	255
Faculty Activity Report	
KAKUTO Chizuko, KIKUCHI Noritaka, KANKI Yumi Learner Courses and Academic Lecture Meetings Held by the Faculty of Human Life Design	261
Prescriptions	265

Published by
Toyo University, Faculty of Human Life Design
Asaka, JAPAN